

## 編集後記

研究社発行の雑誌『英語青年』が本年の3月号をもって印刷版の発行を打ち切り、規模を縮小してオンライン・マガジンに衣替えするそうです。実はいま、紙媒体最後の3月号の「編集後記」を開いたまま、この欄を書いているところです。『英語青年』は1898年に発行されて以来、太平洋戦争の荒波を乗り越えて、今日まで常に英文学界、英語学界の水先案内人として受け入れられてきた一流の専門雑誌です。英語に関わる読者だけではなく、文系、理工系を問わず、広い分野で学び働く人たちが支持し愛読してきました。いわば教養のシンボルと言ってよいでしょう。私がまだ大学院に在籍していた頃、周りの学生の多くが英文和訳や和文英訳の道場に挑戦し、採用されるかどうかで、一喜一憂していました。この雑誌が一つの時代の使命を終えたというのは、近年の教養の衰退と関連があるように思えてなりません。昨年号でしたでしょうか、「英文科はこれから存続できるのだろうか」といったかなり悲観的な特集が組まれたりしました。英語が単なるコミュニケーションの手段や資格認定の道具に成り下がってしまい、どの大学でも予備校や「駅前留学」的な教育にまい進する姿に、はっきりと教養の落日が映し出されています。

かつて大学はアカデミックな場所でした。「アカデミック」という語には、大学などの高等教育機関を指すほかに、「学究的な」、「非実用的な」、「現実離れした」、「一般教養の」などの意味があります。金銭と出世の野望渦巻く現実世界とはまったく別の、浮世離れした、けれども、人間が人間として生きていくには必要不可欠な知恵を磨く場を提供するのが大学の元来の使命でした。法人化後の大学は、グローバリズムの号令の下、小賢しい官僚とプラグマティズムの化身である経済界の連中の草刈場となってしまいました。大学教員も己の専門の深みの中に沈み込み、教養とは無縁の顔つきで、専門ジャーゴンを発するばかりです。

『北海道言語文化研究』は、第7号に入りました。言語を中心とした人間の営み全般に亘って研究の視野を広げ深めていくというのが、そのコンセプトです。おかげさまで、国内外からの参加者、賛同者も増え、11編の論文が寄稿されました。本誌を中心としてこれからも益々活発な研究活動を展開し、室蘭から世界へと多様な研究成果を発信していきたいと考えています。教養の復権に少しでも貢献できればとも願っております。『英語青年』が往時の勢いを取り戻す時の再来を夢見ながら、ペンを置くことにします。

最後に、去る2月15日に他界された(株)不二プリント印刷所代表取締役・故寄木清二氏に対しご冥福をお祈りします。氏はこれまでに、印刷について様々な助言をしてくださり、私たちを側面から支えてくれました。ありがとうございました。

K. H.